

# ソデイカ沖合漁場調査

金城清昭\*・福田将数

## 1. 目的

ソデイカ漁業には、小型船（1～2名乗組）による旗流漁と、大型船（3名以上乗組）による延縄漁の2つの操業形態がある。両操業形態の漁場は、前者がやや沿岸寄りで後者がやや沖合寄りではあるが、両者の漁場はほぼ重なり競合状態にある。そのため、漁場での漁具の絡みや密集漁場での操業を避けるために漁場移動を強いられるなど、操業の効率化に支障をきたしている。今後、両漁法の漁場の使い分や大型船の沖合誘導が必要と考えられる。

そのため、既存漁場より沖合の海域でソデイカ延縄試験操業による漁場調査を実施し、漁場価値およ

び漁場利用の可能性を調査した。

## 2. 材料および方法

沖縄県水産試験場漁業調査船図南丸（176GT）によって、沖縄島南方、宮古島南方および大東島周辺とその東方海域で、3航海、計11回のソデイカ延縄試験操業を行った。試験操業の内、8回が深縄7本付け、1回が深縄5本付け、2回が浅縄3本付けの操業であった（表1、図1）。

調査に用いた漁具と操業方法は、深縄および浅縄ともに前年度<sup>1)</sup>と同様の構造であった。

表1 ソデイカ沖合漁場調査の実施状況

調査回次	調査期間	調査海域	漁法および操業回数		
			深縄7本付け	深縄5本付け	浅縄3本付け
1	2000年4月17～21日	宮古島南方海域	2	1	—
2	2000年4月23～29日	沖縄島南方海域	1	—	2
3	2000年2月19～28日	大東島周辺および東方海域	5	—	—

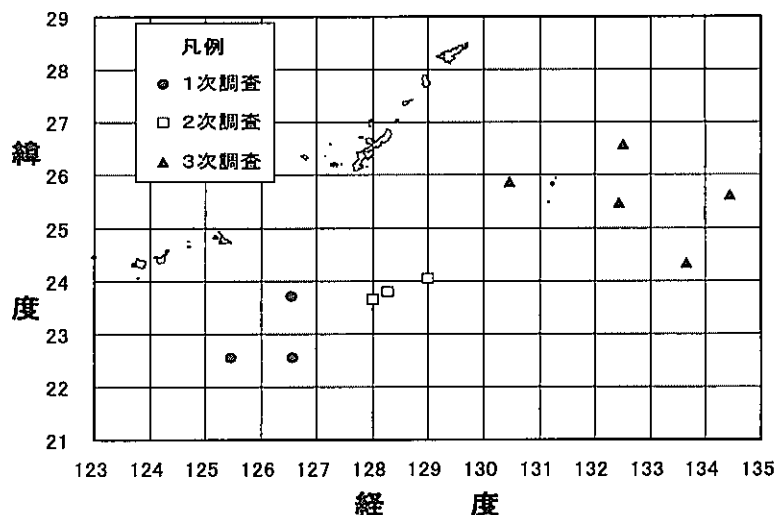


図1 ソデイカ沖合漁場調査の試験操業位置

\* 現在の所属：沖縄県栽培漁業センター

### 3. 結果

**第1次調査** 第1回次調査は、宮古島南方の北緯22～24度、東経125～127度の海域で、ソデイカ延縄深縄5本付けを1回、7本付けを2回操業した。

5本付けではソデイカは釣獲されなかった。7本付けでは、1尾および8尾釣獲され、釣獲率は0.48～3.81%と低かった(図2)。

**第2次調査** 第2次調査は、沖縄島南方の北緯24度前後、東経128～129度の海域で、深縄7本付けを1回、浅縄3本付けを2回操業した。5本付けでは2尾釣獲され、釣獲率は0.95%であった。3本付けでは1回が釣獲なし、他の1回が1尾釣獲され、

釣獲率は0.00～0.56%であった(図2)。

**第3次調査** 第3次調査は、大東島周辺とその東方の北緯130～135度、東経24～27度の広範な海域で、深縄7本付けを5回操業した。釣獲尾数は6～51尾、釣獲率は2.86～24.29%であった。大東島北東の漁場では釣獲数32尾、釣獲率15.24%、大東島西の漁場では釣獲数51尾、釣獲率24.29%と好漁であった。また、大東島南西の北緯24度30分、東経133度30分付近の漁場と、大東島東方の北緯25度30分、東経134度30分付近の漁場では揚縄中に船の周辺にアカイカの群れがみられ、揚縄中の擬餌に表層を遊泳するアカイカが多数かかった。

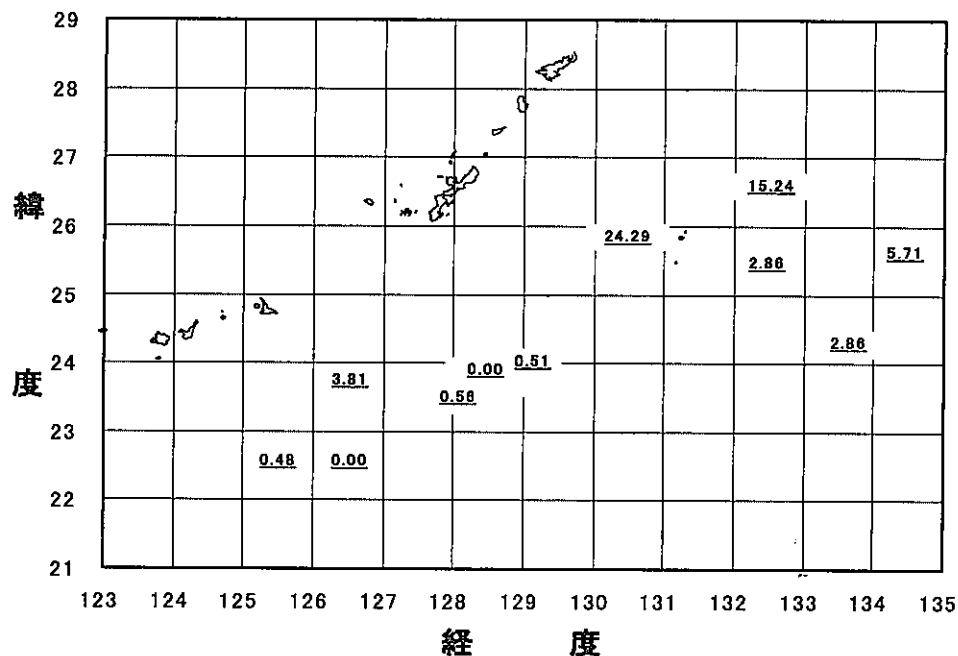


図2 ソデイカ沖合漁場調査の試験操業場所別の釣獲率 (%)

### 4. 考察

4月に実施した第1次および第2次の調査では、ソデイカの釣獲率は極めて悪かった。この時期はソデイカ漁の漁期末期に当たっており、また3月以降県内のソデイカ漁船も極端な不漁であった。

一方、2月に実施した第3次調査では、釣獲率は2.86～24.29%と漁場により好不漁が大きかったが、第1次や第2次調査のように不漁ではなかった。大東島西方と北東方の漁場では15.24～24.29%の高い釣獲率であった。例年、この時期はソデイカ漁の漁期盛期に当たっている。

ソデイカの釣獲率は、同一漁期においても漁場に

よって、あるいは同一漁場においても漁期によって良・不良があると考えられる。したがって、ソデイカ漁場の水平的広がりを把握するには、一航海の調査日数を増やし、短期間に広範囲を調査する手法を漁期ごとに反復して実施するのが望ましいと考えられる。

### 文献

- 1) 金城清昭 (2001) : ソデイカ延縄漁法における深縄と浅縄の漁具性能の比較. 平成11年度沖縄県水産試験場事業報告書, 27-34.